

四十九 小野篁広才の事 (宇治拾遺物語卷三 第一七話)

今は昔、今は昔、小野篁といふ人おはしけり。

嵯峨さがの御門みかどの御時に、内裏に札を立てたりけるに、「無惡善」*と書きたりけり。御門、篁に、「読め」と仰せられたりければ、「読みは読み候み候ひなん。されど、恐れにて候へば、え申し候はじ」と奏しければ、「ただ申せ」とたびたび仰せられければ、『さがなくてよからん』と申して候ふぞ。されば君を呪ひ参らせてなり」と申しければ、「これは、をおまえのれはなちては、誰か書かん」と仰せられければ、「さればこそ、『申し候はじ』とは申して候ひつれ」と申すに、御門、「さて、なにも書きたらんものは読みてんや」と仰せられければ、「何にても読み候ひなん」と申しければ、片仮名の子ねもじ*を十二書かせ給ひて、「読め」と仰せられければ、

「ねこの子のこねこ、ししの子のこじし」

と読みたりければ、御門、ほほゑませ給ひて、ことなくてやみにけり。

* 無惡善、普通に読めば、悪なくば善し。ただ、立て札なのでタテカン的なスローガンと考えられ、当時贅沢をしていた嵯峨天皇への庶民からの批判の意見なのだろう。訓読みは意味読みなので、悪を「さが」と無理に読むことができないわけではない。本当に小野篁が書いたのかどうかは不明。

* カタカナに「子」の文字があったらしいが、文意は漢字でよい気もする。